



全国支部懇談会記念山行 (9月17日、久住山頂にて)

### 大じ 塚め懇 博に談 美梅会会木は 長秀佐 か徳藤 ら東副 本九支 懇州部 間 談支長会部の 開長司 催が会 の歓の 意義やある 流盛大 昨い始 のつり 日を 本行開 山い会岳、式

会続で

のいは

動ては

久に夜み に致のるな 七部開一 住移の荘一こ開記行催こ○よ催七司 山し懇」日ぎ催念事しの名りさ日二 を、親を目のします。 をとはけると、でのした。 をとはけると、でのした。 をとはたらのる。で日加れる。 でのしが三たののは参のでのは参のでのでいる。 でのは参のでのでいる。 でのには参いる。 でのには参いる。 でのには参いる。 でのには参いる。 でのには参いる。 でのには参いる。 でのには参いる。 でのにはがらいる。 でのにはがらい。 でのにはがらいる。 でのにはがらいる。 でのにはがらいる。 でのにはがらいる。 でのにはがらいる。 でのにはがらい。 でのにはがらいる。 でいるがらいる。 でのにはがらいる。 でのにはがらいるがらいる。 でのにはがらいる。 でのにはがらいる。 でのにはがらいる。 でのにはがらいるがらいる。 でのにはがらいる。 でのにはがらい。 でのにはがらいるがらい。 でのにはがらい。 でのにはがらい。 でのにはがらい。 でのにはがらい。 でのにはがらい。 でのにはがらい。 でのにはがらい。 でのにはがらい。 でいるがらい。 でいらい。 でいるがらい。 でいるがらい。 で 川ほがしののい環本あ本し、七 にぼ開て、 にぼ開てでうとが、岳島ででうして、 でうしてであるとが、岳島でを本した。 できる員さ記をるとで、部国の を記をする。 をできるののののでは、 できるのののでは、 できるののでは、 できるののでは、 できるののでは、 できるののでは、 できるののでは、 できるのでは、 できるのできるのでは、 できるのでは、 できるのできるのでは、 できるのでは、 できるのでは、 できるのできるのでは、 できるのでは、 できるのでは、 できるのでは、 できるのでは、 できるのでは、 できるのでは、 できるのでは、 できるのできるのでは、 できるのでは、 できるのでは、 できるのできるのでは、 できるのでは、 できるでは、 できるでもでもでもでもでもでもでもでもでもでもで で記念で記念 度国○を要にみ国別う の支周毎行終の支府 山牧二活談 定部と年事了参部市 期懇な持のし加懇及 行ノ日動会 を戸目報で 行峠は告 会会東回ち を会九 加は重 つを舞の別 でを九りで 連月 たス台懇府 決大州でも え タを談市 定分支実 る全峰 九会の しの部施最 と国を 、地はしも ト重らつ 延一舞 ベハ台 開に

催招そいき

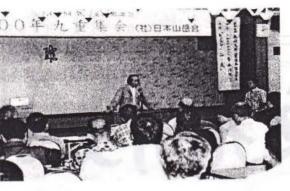
峰にる

### < C 第17回全国支部懇談会 2000年九重集会 山で唄う歌 3 チロル&ドロミテアルプス 4 5 梅里雪山の麓を行く 故郷の山を想う 5 帰りを待つのは… 浮岳から雲仙普賢岳 日南地方の宮崎百山へ 8 お知らせ 9 後記 10

一支に

主催者としての 東九州支部 へのねぎらいなど 催に向けて努力 あいさつがあ

の話題などについて披露された。を始め昨今のヒマラヤ登山事情 ストをはじめとしたヒマラヤの 藤惇生 スライドを使用して、エベレ ヤの西東」と題して、 いては記念講演で、講師 前会長。演題は「ヒマ 歴史や登山コース 数多く



偲ぶ声などが響き、 元会長の話題が引き合いに た、この講演では度々今西 の共感に満ちた笑いや往時 (講演する斉藤前会長 またいたるところで今 ピソードや人となり 氏を知る多くの会 出

音

り返ると、

はるか沓掛山の稜線

から延々と続

いてくる我が会員 観であった。

長蛇

別れ下 の列は

0 壮

小屋

の広

着。ここでトイ

登りにさしかかるあたりから振

きとなった。 西元会長を偲ぶ講 演会 0) お \$

一根を満

行事計 報告や、最近の主な行事、 年の案内もなされた。 支部長から、 が決まっている石川支部の津田 0 から順番に各支部の活動 き続いて支部懇 支部懇談会開催地となること またこの報告の中で、来年度 記念講演の後は 計画などの報告がなされた。 あるいは主要な登山計画、 さっそく丁寧な来 同じ会場で引 北海道 状況 出 来 0

記念山行は一七日

出

が始まった。はじめに梅木支部 盛り上がった頃には各支部が順 かな懇親会がはじまった。宴も 長の開宴あいさつがあり、続い 加藤会員の司会のもとで懇親会 チが披露された。 ージ上で順次歌や踊りやスピー 番に出し物の披露となり、ステ 木支部長の乾杯の音頭でにぎや て昨年度開催地の岐阜支部の高 時からは会場を移して、

> 久住山 A 班

登頂組)、

一時までに赤川に下 ていたとおり、特急

(健脚コース…

なり、 石川支 会員全員がステージにあがり、 的 たところでお開きとなった。 員が立ち上がってのコーラスと 0 「坊がつる賛歌」を合唱し、こ 懇親会の最後は来年度開催地 歌の三番にはいると会場の全 そして最後は 宴は最高潮に盛り上がっ 頭で めくくつ 支部長 地元東九州支部 の一本締

ことも出来ず、

掛山

仲間は皆歓声を上げていた。

んで先に向かった。扇ガ鼻下のことも出来ず、順番に山頂を踏

A班が、さらにその後にB班が大時五○分に出発。少し遅れて大時五○分に出発。少し遅れて大明五の三班に分かれ、特急班は 分近く早く牧ノ戸峠にバスは 行を予感させた。予定より二〇 着。ここでかねてより班分け は星が輝き、好天のもとでの 一発から始まった。早朝の B班(ビスタ の不前五時の午前五時 中岳を経 山する組) 班(午前十 空 到 育から。 が山頂を 到着 きりに歓声をあげる。トランシ 強い風が少し気になるが快晴 る会員で一杯になる。西からのる。狭い山頂は後から登ってく するようにB 空のもと、最高の展望に一同 通って天狗ガ城に登る。 に次ぐ本日二番目のピークであ 山頂を後に岩場を下り が入る。小休止の後、 班より久住山 スして空池 中岳

高原と阿蘇、祖母の遠景に遠来 出発した。(これより先はA班 掛の肩に着くと南に広がる久住 の頂上は狭いので留まる 早朝は 沓 でかなりの時間を要する。 を通って久住 住山頂に一〇 L 「ここが九州本土 た後再出発し、 Ш 最高峰

高度を上げるごとに左手に早

峠から舗装された急な登

飯田高原の視界が広がり、

を中心に報告。)

のもとで、みんな素晴らしい展始めていたが相変わらずの好天始めていたが相変わらずの好天が根影。強い西風が吹き続ける 望を楽しみつつ、 すでに二時間近くも前から山 Ш を開 いてA班

の無線が入る。それに呼応 を通じて特急班より中岳 まま 沓掛 0 岳、頂領に独到 縁を L 0 Ш たは

たたく間に会員で一杯となる。に到着。ここも狭い山頂で、ま いのでここでまたゆっくり休憩歓声が上がる。予定時刻より早 数なので最後尾が到着するま 中岳山頂 へは九時一五 時一〇分到着。 頂に向かう。久 御池のほとり か」と 分過ぎ 多 ま

頂についていたB班と一緒に記 所で昼食。やが 山頂のあちこ

> 面の道 していたバス三台で大分駅、 着した。ここで流れ解散。 ほぼ予定どうりの午後一時に 防ダム工事用の林道には十二 さらに黒ボク土 ・前に出て、 別府方面 頂直下 いくB を慎重に下って ス三台で大分駅、まこで流れ解散。待機うりの午後一時に到うりの午後一時に到明の林道には十二時間の林道には十二時間の林道には十二時間の林道には十二時間の林道に下っていく。砂 へと向かっ の急な岩場を下 の滑りやすい を



(久住山頂で (B班))

に停滞していた台風十四十一〇日ほど前から東シナ に恵まれ カ 月に入って以来あまり ず、 とくに開催予 から東シナ海 号 付近 0 定好 籴 の天

い四国のやまなみもかすかにれ、東方はるか彼方には、極れ、東方はるか彼方には、極 県境のやまなみ、釈迦岳や渡神 さらに英彦山、犬が岳など福岡 飯田両高原 遠く祖母、傾連山 はじめ、 b 催日の前日あたりから快方に向 気が最も気がかりであったが こうして好天に恵まれ 二日前には台風も遠ざかり、 山頂で など津江の れることとなった。 快晴で、 れた一七日は朝から雲一つない始めた。特に記念山行の行 で、連日不安定な天気 か眼にすることが出来な 間近に阿蘇五岳や久住、 最高の登山日和に恵 の準備をしていた 山々などが一望さ た久住 #

目指して先を急ぐグループもあ蘇山や祖母山あるいは霧島山を 0) そうした遠来の参加者の中には 登った人達や、終了後そのまま 一日早く来て由布岳や鶴見岳に 遠くからの出席者が目立った。 足で、 2わりし 道支部からの訪問で、 かく九州に来たついでにと や秋田、岩手をはじめ、 九州の深田百名山 加者 そ 山のを阿

(文責 飯 (田勝之)

# 事務局に寄せられた

談会の御成功おめでとうござ 料層 秋冷の候 全国支部懇 東九州支部の皆様ば ました。 かりでな

、オール九州でおもてなし

かに見

をいただいたような、満足し た感じがしました。 ただき感謝申し上げます。 間などから会議に遅れてし 《私の勤めの都合や飛行機 なお、あずささんには特に いましたが、 数を煩 わせててしまい申 越後の時間を

ございました。 りませんでした。 b 難う

程」は九月の連休の中、日本山 在会でほぼ満館貸し切り状態で ある。受付時刻の十一時の一時 ある。受付時刻の十一時の一時 を見せる会員が、互いに久し がり返来の会員が顔を見 がりですると

後支部 お礼まで (新発田 敬具

関ホールはさながら

ティ

に早

いで一杯です。 有り難うございました。九州の 十三回の頃世話をしていたラグ さて、今日は九重集会の写真 登山の二日間、楽しい思いを皆様の御尽力で楽しい懇親会 の会場に通う毎日です。 四十数年前の第

五十五回

と登山の二日間、楽し します。 貴支部の益々の たしました。 御 発展を祈念

富山支部 (富山市 福田 (奉文)

集会」に参加させていただき、 る事ができ、 なりました。遠方にて、なかな ております。又本日は写真を送 様にお会いでき、親懇を深め 出かける機会も少なく、今回 部の皆様方には大変お世話に 先日 は「二〇〇〇年九重 大変うれしく感じ

子) (一〇、一七) 福井支部(敦賀市 本以

のご発展をお

祈り申し上げま

ますと共に、東九州支部の益々

いただき重ねてお礼申し上げ

ŧ 啓 北 した。貴 地はいかがでしょう

支部の動員力には感心しまし。 過ごさせていただきました。貴 先日は懇談会に山行と楽しく

民体育 岩手支部(盛岡市 うと思いました。 全国大会を引き受ける支部 々によろしく。 た。先ずはお礼まで。 いただきありがとうございまし 0.1 この度は記念の写真を送っ

重ね有りがとう御座います。東写真をお送り下ざいまして重ねるれが遅くなりました。沢山の す。そちらは如何でしょうか。 九州支部の御発展をお祈りしま しい時を過ごさせていただきま が、今朝も朝より平地にも雪が して有りがとう御座いました。 こちらこそお世話になり、楽 海道の山々はすでに雪で 朝を迎えておりま

支部 礼 幌市 石

加 藤 英 彦

念誌に私が書いた拙文「山で唄この度の支部創立四〇周年記 う歌」について、その後二つの お便りを頂 いたのでそのことに

支部の方 は まで出迎もこってあり、一日早く九 った。同行したのは前会長の斉のすごい突風の中、由布岳に登 ついてふれてみたい。まず ある。この方は創立集会に は京都支部の高村奉樹氏

り一九カカカカ 養歌」の歌詩著作権由来記があ でK(京都大学学士山岳会)の でK(京都大学学士山岳会)の でK(京都大学学士山岳会)の CK(京都大学学士山岳会) わけである。

由布岳へということで案内した

都支部の方達

で

一日早く来て

紅一点の田中さんと計四名の京 藤惇生さん、中川さん、そして

泉にて、 興味ある文である。 の言及におよんでいてなかなかそしてこの歌の著作権について ーツをたどった詳細について、 郎氏の作詞であることやその 雪山 賛歌」は 大先輩である西堀 昭和二年鹿 栄三 沢温

東大スキー山岳部七五周年便りが届いた。そしてその 浪の歌」について書いたものだ「山」に載った中村先生の「放 覧になって私宛に近況を含めて から、さっそくこの記念誌をご よりの便りである。私が会 そして二通目は中 があった。 村純二先生 史中のに 報

あるも べた論文であり、 放浪の歌」について先生 のであり、 これまた興味 その中に 0

年の間違い が誕生を大 京都大高村氏の文にある昭和二とあった。そこで私が、前述のスキー合宿を終えた後に作った 生より昭和二年が正しいですと 村先生に問いかけたところ、先 摘したところである。そして中 と記してあったので間違 のご返事を頂いたのだ。 誕生を大正 つる賛 郎ら京大山岳部員が鹿 いずれにしても、私の記念誌 間違いではないですかと中 正十五年一月西堀の中に「雪山賛歌 支部長を広大〇 1 賛歌 といを指

### アロルル ハイキング ミテ

せることも

なく、

比

較的

静

かで

熱いコ

安 幹

1 々を巡る旅をすることが出来た。 れ 0 キングツアーに参加して、 プスのチロル&ドロミテの 初日 月一五 は一九 日からヨー 時 間の長 U が旅で疲 ツパア 才

時期なのでまだ明るい。時差八時過ぎ、それでもサマータイム 時過ぎ、それでもサマースブルックに着いたのが さすがに疲 時間を加えて一九時間の し、バスでチロル州の古 いでやっとオーストリアに入国 そのままミュンヘンまで乗り継 の直行便でフランクフルトへ、 航 関空から 空のジャンボ れを感じた。 ルフトハンザ 機で 十一時間 でである。 長旅は .

タリア、 私たちが訪ねたチロル・ドロミッパ大陸の分水嶺となる。今回○㎞に及ぶ長い山脈で、ヨーロ は違い、多数の観光客が押し寄知名度の高いスイスアルプスと オー 部のアイガーやモンブランなど テは東部アルプスに属し、中央 C アル ストリ チロル・ドロミテとは プスは、フランス スイス、 アまで 東西一、二〇 ドイツを経て からイ

買っても

らいたいと考えていま

支部財政から見ても全員一冊

は

局で販売中である。 のだと思う。一冊千

値はあるも

く作った記念誌であり、

読む価

もらいた 達にも是非

かり

のである。せっか

参加したものは一部づつ には会合(全国支部懇談

配布 公会)に

L

会合に参加しなかった人

読んで関心を示して

すばらしいも

のであり、支部員

三君の苦労した末での完成で、

この記念誌は担当した安東桂

嬉しく思った次第である。 両氏と共に新しい交流が出来て 京大と東大の両校の会報を頂

書いた文のおかげで奇しくも

き

されていたということを

眼

方が少

L りで

りである。

元気になられるよう願うば

回復に向かわれ益々

適地としてヨーロッパ各地の人の景観を備えたリゾート地で、 々に親しまれているところであ る。 ながらの 素朴な味わ いと独特

ルの山々 節は す n 0 雪 から 美 L V F

さな街、 00 手の山は最近降った雪で真っ白高山植物の花が見られる。行く な道を二時間ほど歩いて二、山口へ。ここから谷間の緩や は、三一名で、 に光って美しい。私達のツアー ことながら女性が圧倒的に多い。 (両手に花などとはとんでも 面の ッテまでの明るい空の下は、 ンテル谷最奥、ヒェントの登 エッター・ mのマルティンブッシ・ヒ 緑の ゼルデン 年ばかり、 中に、色とりどりの 男一〇人、女十 n プ からバスでヒ ス いつもの 緩やか 麓の 五. な

る。 イも もので、 は n 開けば二日 発で 景色をプレゼントされた様な 大雪で登山電車やロープウエ 続いたと言う。スイス地方で 囲の山は真白い雪山で 次第に高 達には思いがけない美し まり、大変だった様であ 美し 度を上 前まで四日間 V. 素晴ら げて いくと、 雪が降 美し L W 0 V

・ヒュッテに着き、 十一時過ぎ、 ある。 7 ルチンブッ 眼 前 の雪 3

得して慎重に下

を眺 イッツブッシュピッツ山 早い昼食をとり、 めながら、 いよいより ンドイッ 頂へ

雪が小雨に変わった中

H かの

刻ホテ を、 路を辿る。いつの

**辿る。いつの間に** 一を飲んで一体な

にみ

帰りほっとする。 麓の街まで歩いて夕

安心していたのに、いつの間に 近では三〇センチを越えるよう 登が続き、息が切れる。 怪しくなってきた。かなりの かガスがかかりはじめ空模様も になった。朝出るときは青空で 深くなり、高度三、〇〇〇m センチから二〇センチと次第に ○○m登ると雪道となる。一○ 面をジグザグに一 急 付

名な登 雪も深く、また、視界も のジョセフ氏がついているので 先導は地元の国際山岳ガイド り、お互いの服装も夏山の軽装 山を一二三日間連続登頂した有 家)と重広恒夫さん(日本百名 北 村 不安はないし、ツアー講師の中 してくれて 極の三極踏破の世界的冒険 進さん(エベレスト、南極、 山家)が私達をサポート いるので心強いが、 悪くな

になった。 地点が限界と判断 でもあったので、三、 引き返すこと 000

> 隆起した巨大な堆積 から呼ば せる不 ドロミテとはドロマイトの 等あたかも摩天楼 れ、塔や鐘棲、 思議な景観 を呈 階段、 世界を

もドイツ語が通用。 と呼ばれていたところで、今で ささるような先鋒が並んでいる。 グのメッカと言わ ミテは昔 は あって 大きな岸壁や天に突き (白雲岩) のある山ということ 成された岩盤が地殻の変動で、ら呼ばれ、地質時代に海底で の地方は第一次世界大戦まで 壊を重ねて、いろいろな姿が オーストリア領で、 褐色 天地 からロッククライミン の岩塔が林立 のド ロミテの れてきただけ 群が浸食や 南チロ するド い思 岩 12 п 4 -



摩天楼のようなドロミテの奇峰

る岩峰群に見とれる。 る岩峰群に見とれる。 る岩峰群に見とれる。 る岩峰群に見とれる。 る岩峰群に見とれる。 る岩峰群に見とれる。 る岩峰群に見とれる。

進むにつれてそれぞれの姿がしているクライマーが米粒のよしているクライマーが米粒のよしているクライマーが米粒のよしているクライマーが米粒のよりに見える。

○ 再び国境を越えてザルツブ

幾度も振り返りながら帰途につ景観に圧倒されて疲れも覚えず、

リア最高峰のグロスグロックナエイを北上して、途中オーストえ、グロスグロックナ・ハイウ最終のコースは再び国境を越

(三、七九七m)を望むフラン(三、七九七m)を望むフランにあることができ、中世の面影を残す美しいずな姿も見ることが出来た。可憐な姿も見ることが出来た。可憐な姿も見ることが出来た。可憐な姿も見ることがでは、モーツアルトの生家を訪ねたり、ーツアーを無事終ることができた。



# **梅里雪山の**

玉龍雪山ハイキングより) 梅里雪山氷河トレッキングと

### 安藤セツ

子)徳欽(標高三、四〇〇m)へ) ・ウオードがその著書「青いケシの・ウオードがその著書「青いケシの・ウオードがその著書「青いケシの通り雲南省最高峰梅里雪山(六、通り雲南省最高峰梅里雪山(六、

との幸せを精一杯感じる。約六爽やかで、別天地の中にいるこ

時間のハイキングは移りかわる

青空四月二六日(水)天五 蛋り時々

れの斜面に少しの平地を利用してきく。道は奥地へと入り、メコンの流光るところもあった。鶴の飛来地とナババイ湖は広い広い渓承に水のサババイ湖は広い広い渓承に水の

いた。
いた。
は灰色の空の中に名峰に雪をのせて
の風景も消え、連なる山々に白いも
の風景も消え、連なる山々に白いも
段々畑が作られていたが、やがてそ

ルの風景だった。 けられている様は、夫の様ったネパーチョルテンにタルチョーがいくつもか

とを祈った。寒いというよりほっぱく く中をハイキングする。高度四、二 春の宵地酒に口は火の如き せつ 洗濯したものも乾かなかった。 れてあり、このように眺望出来るこ 食堂に梅里雪山と水河が壁に描か よいよと胸が昂ぶる。徳欽のホテルの 吴迎宴客仰雪渓」の門をくぐるとい 歩きを終え、またパジェロへ。「梅里 光果でしょう。それが見たかった。 では同花はまだまだ先のことだろう。 には石楠花がずっとある。この雪の中 OOmとメモにある。針葉樹林の下 ピンクに染まればどんなに見事な 寂まで落ちてきた。気持ちいい 時折り白い雲の向から青空が現

水村までトレッキング) ・専用車で徳欽発、最高峰カワ ・東田車で徳欽発、最高峰カワ ・東田車で徳欽発、最高峰カワ ・東田車で徳欽発、最高峰カワ ・東田車で徳欽発、最高峰カワ ・東田車で徳欽発、最高峰カワ

四月二七日(木)天義 蛋儿

朝は雨があがっていたものの、雲は

低く飛来寺の眺望が安じられた。後盆の水インストリートは工事中で、徳欽のメインストリートは工事中で、活車したパジェロはすぐに泥を被った。 古娘の胸は恋人にデートをスッポカされたようにキュンルとをスッポカされたようにキュンルとをスッポカされたようの眺望が安じられた。

のガレ堪花等あろうはずもなし、そ トーザーが唸っているよ。下は千丈の どり豊かになるまでの苦労が偲ばれ 届きそうな段々畑を見て思い. み ありまた食しかりを、山の上まで わせた。 谷がメコン河へと落ちている。どうし れよりも大変だ、土砂崩れ!! ブル たのかタイムをメモしていなかった。こ た。トレッキング同妹。興奮してい トップ。ほんとうにお疲れさまでし 落石に気を使っている。車はついにス はっきりして来る。ドライバーは常に **ナ深く、メコン河の茶と支流の差が** た。こんあ果色も消え、谷はますま (明永村へ)人の生活に水は絶対で ましょ!!

(夫) 木とかしっかりした物は、(夫) 木とかしっかりした物は、一プを両手に登った。
「大) いる男の人を信頼して、細い口太 いる男の人を信頼して、細い口太 いる男の人を信頼して、細い口太 (夫へ現場再現報告)

た。アナタより他の男の手を初の人の手をしっかり掴んで歩いじだから、手を引いてくれる男来る幅の道を作った。そんな感来る幅の道を作った。そんな感味の、ちょっとまえトラバース出(私)全然、何せ土砂崩れたも

ワグボもメン (夫)そんな状況ならまあいいに泥を被った。思うよ…、ニタニタ…。等けた若いと-はエ事中で、 く見なかった。多分まだ若いとくじられた。 めてしっかり握ったり。顔は良

か、喜ぶな!!

れている。

(昼食) おべんとうは丸いバン(昼食) おべんとうは丸いバン

(乗場体験)「場に乗りたい方は明水村まで八十元です。」一四〇〇水村まで八十元です。」一四〇〇水村まで八十元です。」一四〇〇水村まで八十元です。」「アンタと心中するのはゴメンだから落ちるような場底せんわー」そうだそっちるような場底せんわー」そうだそっちるような場底せんわー」そうだそっちるような場底せんわー」であった。「場さん重いけどよろしくネ。」「アッ)白スミレ」「アッフャメ」「アッ)黄色い花」「場上では写真は撮れないー」体むこと二度三度ついに氷河が見えてきた。



# 被郷の山を想す

渡部昭三

降り立つと、まず眼前に黒く右豊肥本線の緒方駅のホームに

紫水明の と聳えている 村です。 (大野川) に右へ裾を延 び込んでくる。 野とその をた 緒方5千 から が た 私 中央に清流緒 石 傾 私の生まれ育った流れる、そんな山 の稲 母 Ш そして足下に が目 右 穂が実る緒 ゆったり 奥に三 0 方川 中に

グ感覚で、 る程 に沢山家があるなあと驚いたこ山が操業しており、こんな山奥って行ったこと、当時は尾平鉱 かったと言う記憶はない。ただことなどが思い出され、しんど たということでした。 下山の時に 台 とは殆ど覚えていない。 数人で登ったのだが、当 の山、最 しかなかった木炭自動車に乗 春休みに学校の先生や学友十 住度で、 - トルが何回も解けて困った足にゲートルを巻いていて、 七五 八旦である。 無我 走って下りた気がす 本 無我夢中登って下り敢初の山はハイキン 百 登 名山 0 た Ш はこ 小学五 村時の一こ のこ 田田山 0 故 程 佃

平は 人口は減少していた(昭和二十九年)で 平は尾平鉱山の閉鎖に着いた。当時の尾 時過ぎのバスに 走っており ま 時頃尾平 が一日

水筒、 運動靴、レ した。 します の人口があり、 ものの、営林署関係 んな装備で登 0) の人が多く入り約400余り 服装)、 当時の 煮、 度で、今 で、今から見ると、よくこマッチ、懐中電灯、毛布 が、 の缶詰、アルミの食器 登 当時 飯盒、米、梅干、塩、インコート(通学時 一山装備は、学生服に れたものだと感心 はこれ 賑やかであった が普 通 で

なり、寒くて眠れなかった。ながら寝る。朝方には薪もなくつれ寒くなり、交替で火を焚き れる飯ができた。夜が更けるに味いながらも、どうにか食べら 焚くも芯 を炊く。 着く。先ず ごろ初日宿泊する九合目小屋 퐾 したり、 十二時ごろ登 朝は六 自 0 で展望がきかず、神武六時前に出発、祖母山くて眠れなかった。 大騒ぎしながら、不 薪を拾 ある固い 宅での予行練習通 Ш 開 VY 飯で、水を 始 飯盒で飯 L 174 ŋ 12

年(昭和三〇年)の春休み、

校で同

級の藤原(旧

姓

一回目に

登ったのは、

校一

立 って いる 0 が渡部)

母か く友の姿を見失わないよう声を Ŧī. 0 は山あたりで霧が小雨に変わる。とけながら、夢中で歩く。古祖 メートル程度の 大 の難 所を下る。 視界で前を行 霧が深

尾平越の小屋に着く頃は雨も上がり、視界も少し開けてきた。小屋に入り濡れた服を干し、昼飯のおにぎりを食べる。実に美飯のおにぎりを食べる。実に美低のおにぎりを食べる。実に美いった。着替えなど持って来てないので、半乾きの服を着てれるのに気付き、暗くなる前に九折のに気付き、暗くなる前に九折のに気付き、暗くなる前に九折のに気付き、暗くなる前に九折のに気付き、暗くなる前に利けてきた。 た着く。 へとへとに へとに疲れて五時過ぎ小屋なく、三人共ひたすら歩く。

ートなど全て着込んで、三人肩リックに足を突っ込みレインコ を お 9 寄せ合って寝る。 トなど全て着込んで、三人肩 夜は冷え込んで寒いの越えの小屋は一部壊れ 7 T

うで、 いる、 の切立った岩峰 11 まるで絵を見ているよった岩峰が朝日に輝い 屋を出ると、 前に 傾

à

ルで

釣りと

遊

ば

える祖母・

休み登ることになっ

学して

通学途中で見

曇りで

5

いる

の

前で記念撮影(写真

下の

の豊玉

姫が祀られ

T

神武

校まで片道八から九kmを徒歩

時三人共、自宅から竹田

と三人での

祖

母

傾縦走登

山で

部).柴田(旧姓三代)の両君

る。 る。どんな名人でも作れない、らしいハーモニーをカすし、し する。十 まさに は山の上とは思えない別天地だ くあの頂上に立ちたいと、急 た。五 食事の支度をし、早々に出発 力があり、実にすばらしい。 を上 天の配剤の「大庭園」であ 葉の 時ごろ頂上に立つ。そこ 松の緑と巨岩がすば 村 から見るより 早

上畑へ、上畑の高山商店で残った畑へ、上畑の高山商店で残った。
東り尽きない頂上を後にする。
提り飯に梅干の昼飯を食べ、名
握り飯に梅干の昼飯を食べ、名 て大パノラマを満喫する。山々、しばし時の経つのを忘れ東には新百姓、夏木山、大崩の遠く宮崎の山々がかすかに見え 山、古祖母、大障子山々、西に根子岳、山々、西に根子岳、 上畑へ、 たい、の、 た米を予 Ш 帰りのバス代にお釣りがき から 頂 からは 嬉しかった。 想外に高く買ってもら 母、大障子岳、祖 し時の経つのを忘れ 姓、夏木山、大崩の 由 0 布、鶴見の 度の展望で

たあの "」と言う達成感と青春 われる山行は「いつも眺 行で 級生三人の あった。 (以下次号) やったぞ の冒険とも思 0 思 VI

## 帰りを

その

1

...

従って、これしかないと決めた 山を決めたら、人が少なくて面 6 山を決めたら、人が少なくて面 6 小コースを求めてあれこれ悩 -れても、 もパーティ ってケー るが)、負けまいとがぜんやる いることを知ると(誰かにもよ コースを既に歩いた人が身近に たことのない山、他 北アルプス、百名 るきっかけは?・・・とにかく では、登る山、 て、また目的 ティー 年齢、体力、 スバイケースだろう。 単独行派?、 派?・・・と聞か 7 山、まだ登っ 人の山 スを決め 日程によ 技術によ 2 行記 6

達がいないため、今回も単独行。二五日夜発高速バスで鼻息も荒二五日夜発高速バスで鼻息も荒計画。強気の行程を組み、八月 計与 気が出てくる。 今回 R車中では、 針人 1 ベスト 木岳 は、初めて 古屋から白馬までの + コースとして白馬岳 αの後立山 お絵 同席 のテント かき、 の六歳 縦 走を 泊。 0

中で置き忘れたようだ。ソック を忘れず良かったと思いつつ動 を忘れず良かったと思いつつ動 経を隠せないまま、リミットの 一四時に白馬尻小屋を通過、雪 そこまでのハイペースと冬山並 でて日没、鼻息も萎えた。小屋 にて日没、鼻息も萎えた。小屋 にて日没、鼻息も萎えた。小屋 の中に泊まりかけで、テントだ。 の中に泊まりかけで、デントだ。 の里空に満腹の胃袋、ビールで 整杯、満足満足。 を繋が、は、 を繋が、結局お花畑避難小屋前 でしてにないう間に体 があっという間に体 があっという間に体 の中に泊まりかけで、デントだ。 の上で、 があっという間に体 の中に泊まりかけで、 が上上に の中に泊まりがけて、 が上上に の中に泊まりがけて、 が上上に の中に泊まりがけて、 の中で星を 一四時に白馬尻小屋を通過、雪を忘れず良かったと思いつつ動を忘れず良かったと思いつつ動を忘れず良かったと思いつつ動をおがまま、リミットのとなり、靴のではないまま、リミットの がないたは

決して休みを に休憩をとら に休憩をとら 槍 \$ 直り、再び深い観子三人をとらない親子三人をとらない親子三人の はないが、清るの ではないが、清るの ではないが、清るの ではないが、清るの 大変のは 大変のではないが、清るの 大変のではないが、清るの 大変のではないが、 大変のでが、 大変のが、 大 見 な中でい年な 元 スで 夫 4 と絶対私と馬発 婦 と、対

野死の時間

り客と下く 1 全 相とと見かなルで 変数 飲続られ、虫

営頂上小屋へ。 営頂上小屋へ。 選前になっても悪 現がいに咲いており れいになれと栄養が

屋歩G瞬岩 ガスも 普 5 晴 調 一登ると 餐 鹿り 場を通過 2 拝 着 稜 110 線

た冷気岩吊尾 用 進 歩 場 脚 雲 尾 み 戦 所 が 上 漫 なく、八峰キ 1 × 進まなくなり、 と勝 求めて VX 縫 0 鹿 丰 と緩やかなガレビが下はガスで 雪田田 島 8手に名付け一 はット 田 槍ヶ岳北峰へ到 田を左手に見ながら帰ヶ岳北峰へ到着。 登ると南 面は しかし疲労から **助ガスでまさに** は幸い登山者が 付け一歩一歩 で視界ゼ 場 峰 を下っ 着。天 1.7

冷池山荘には十五時着。テント設営後、再び小屋へ下り生ビト設営後、再び小屋へ下り生ビールで一人乾杯!プハア~、美味い!この夜も通り雨。しかし翌朝には上がり、明るくなって翌朝には上がり、明るくなってった。針ノ木まで行くのは自のこと。針ノ木まで行くのは自のこと。針ノ木まで行くのは自めだけと知り、慌でて出発した。 F

次郎作『強力伝』を読んでくだい。「えらく早いネー・壊倉何時に出たの?」との鋭い質問に「いいちん世話」と笑ってごまかしながらそそくさと白馬岳山頂へ。山登りを始めるきっかけとなった四年前の白馬岳に感激の再会。「風景指示盤については、新田人風景指示盤については、新田人郎作『強力伝』を読んでくだい。

半ガは り客パス 相とと

らず B

田発が遅れ

クラな私

発。

悪く

41

# 雲仙普賢岳

Ė

t 月月例 登 Ш 報 \_ 告

も多い。いつものように午前五 時にサニーに集合。車三台に分 乗し、高速道路を経由して、福 商かった。ここで、重廣さんと 落ち合うようになっている。 仙普賢岳までR うことになっ に会えるということで、 足を延 ている。重 わり、 さら ばそうと らに、雲間さん 粉 廣さん 加 者

ちは残念ながら富士 と富に位 にもかからず順調に進み、午前できなかった。福吉駅まで渋滞 廣さんとは いていく」とのことで、 えていたが、本人が「駅から歩 **一廣さんは予定どお** 時過ぎに到 かつ しようとなり、 車に乗 0 置 (とんぼ) 形をしてお し、唐津方向から見る 着 せていくように考 動で、 福吉 間 一の形が確認 り到着。 9 山で会うこ ど待った。 廣さんの 嶽 急速重 撤に登 筑紫富 到

急坂の所には、ローブが張っているが、道をまたがって張っているが、道をまたがって張ってた。一番滑りやすそうな急坂の所には、ローブが張ってなかった。下るときに、油断して滑りた。下るときに、油断して滑りた。下るときに、油断して滑りた。下るときに、油断して滑りた。下るときに、油断して滑りた。下るときに、油がらの道との分岐となる。ここから頂上 な標識 日の 山分口ほ が成となる。 1) 雨 で あ たりで急 描 面 品がややぬ の三角点 上には、 坂とな the cop かる か小手 あ神 な

浮岳 山頂

村方

面

下りは同じ道を戻り、白木峠し、記念写真を撮った。

よ開いている)と願いつつ、入 時。ここからさらに数分。(門 と雲仙温泉街に着いたときが六 なく、気持ちだけが焦る。やっ 能ではないが、飛ばせるわけも 畑を残り一三分。飛ばせば不可 である。小浜温泉から残り一三 の小山が乗っている。平成新山 その上に尖鋭な形をした三角形 頂には台形をした黒い山が見え、 運転が続いた。遠く、雲仙の山 地を抜けたら渋滞に巻き込まれ、 が、諫早インターを下りて市街 ない。諫早までは順調に行った 時間までに移動しなければなら 閉まり、通行止めとなる。その の有料道路は、午後六時に門が 小浜温泉まで速度標識どおりの 下山。長崎雲仙に向かう。雲仙 ここで、食事をとって、早々に と、ほぼ三百六十度の眺望で、 形の大岩があり、その上に登る 上には高さ三メートルほどの卵 った後、すぐに頂上に到着。頂 けとなった。重廣さんとすれ違 違って、一言言葉を交わしただ 進まない。 射日光で異様に蒸し暑く、足が 結構急坂なのと、木陰がなく直 っているのではと急ぐ。しかし れ気味で、重廣さんが頂上で待 遠く対馬も眺めることができた。 防山へと向から。時間がやや遅 に向かう。 結局頂上手前ですれ 峠に車を置いて、十

だけで去っていった。本当に迷 中警察が来たが、何か話をした けだが、とにかくうるさい。途 ことはいうまでもない。午後十 までぐるぐると回っていた。 惑な人たちだ。彼らは午前三時 るぐる回る。ただ回っているだ ップ音をたてながら駐車場をぐ 数台の車が、けたたましいスリ 邪魔者が現れた。暴走族である 時に宴会も終了し、床につく。 て、宴会。大いに盛り上がった があったのでそこに泊まること たが、上にある広い方の駐車場 あり、その辺り一帯が公園にな 遅し。やむなく、入り口に親 しかし、一時間もたたぬうちに にした。早々に夕食の準備をし の所に大きな屋根のある休憩所 っている。駐車場が二カ所あっ って、右折。仁田峠への旧道が 認に行った。雲仙方向へ少し戻 口の案内を見て、今夜の宿の確 切?に門が閉まったときの登り て休んだのを悔やむも時すでに エリアでソフトクリームを食べ 分の差だった。高速のサービス の時計は、六時三分。たった三 たら)と思い入り口を曲がると ていく車を確認。 しっかり門が閉まっていた。門 (ひょっとし

分岐へ戻る。こごからは尾根道

国見岳で最後の記念撮影をし

仁田峠への標高差約百五十メーだ真っ暗な中、仁田峠へ向かう。た行して午前四時前に出発。約片づけて、飯田さんと西さんが片づけて、飯田さんと西さんがれる。まれる。

緩くなってきたら頂上に着く。 賢岳へ。およそ三十分登り坂が でやっと先発の二人組に追いつ と国見岳の三叉路となる。ここ く単なる名称)に到着。普賢岳 葉茶屋(茶屋があるわけではな らは、登りとなる。約十分で紅 場に着く。ここで休憩。ここか 頃には、夜も明け始め明るくな いた。ここから急坂を一気に普 と、立入禁止の立て札がある広 もまだ見えない。三十分程歩く って、普賢岳山頂も、平成新山 ってきたが、山の上は雲が懸か ここから、平行道を進む。この 乗り場の先に登山口があった。 に行けばいいだろうと行くと、 えずロープウェイの乗り場の方 たらいいのか解らない。とりあ だっ広い駐車場はどっちに行っ に着いた。まだ、真っ暗で、だ った。約三十分で仁田峠駐車場 と思ったら、以外と時間がかか 峠へ。結構急坂で、早く着くか 山頂から、ちょうど日の登る ル。道は広く公園の中を仁田

方向が、平成新山。頂上に着いたときは、うっすらと雲に覆われていたが、次第に全容を表す。れていたが、次第に全容を表す。所々白い煙を吐き、近くで見る形々白い煙を吐き、近くで見るでがに普賢岳がちんけに感じた。標高が百メートルも違うと、た。標高が百メートルも違うと、た。標高が百メートルも違うと、たっただけに、その大きさに驚いいただけに、その大きさに驚いいただけに、その大きとはしていたがは、平成新山。頂上に着い方向が、平成新山。頂上に着い方向が、平成新山。頂上に着い方向が、平成新山。頂上に着い方向が、平成新山。頂上に着い方向が、平成新山。頂上に着い方向が、平成新山。頂上に着い方向が、平成新山。頂上に着い方向が、平成新山。頂上に着い方向が、平成新山。頂上に着い方向が、平成新山。頂上に着いたときは、

る。国見岳へは約十五分。往復 のあたりかはっきり解らない。 丘の上という感じで、山頂がど 仙の主峰を思わせる。普賢岳は 山頂へ。再び見る平成新山は雲 になるのでここに荷物をおいて 主峰の座を譲る日も近い? に出ると、国見岳への分岐とな 大変である。妙見岳からの尾根 返す。これがまた結構急坂で、 紅葉茶屋へ下り、国見岳へ登り 岳を回って仁田峠へ。いったん まだ多くの歳月が必要なようだ。 来ない。自 普賢岳からは、国見岳、妙見 由に行けるようには

を妙見岳へ。左手に雲仙普賢岳、ながら進む。約三十分で妙見岳に着いた。妙見岳山頂のすぐ下にロープウェイの山上駅があり、というので、つられてロープウェイで下りるというので、つられてロープウェイで下りるというので、つられてロープウェイで下りでしまった。仁田峠からおよそ二十分で昨夜の宴会場へ到着。宴会場を片づけ後、国道五十七号線を島原市へ。道国道五十七号線を島原市へ。道国がよるに、温泉に入り、島原で、温泉に入り、島原で、温泉に入り、島原で、温泉に入り、島原で、温泉に入り、島原で、温泉に入り、島原があり、島原で、温泉に入り、島原があり、島原で、温泉に入り、島原が、島原で、温泉に入り、島原が、島原市へ。道

中の真新しい新興住宅地を見る男様に大きな防災ダム、復興途出来なかったのが残念だったが出来なかったのが残念だったが出来なかったのが残念だったが出来なかったのが残念だったが出来なかったのが残念だったが出来なかったのが残念だったが

らされた山行となった。と、自然の怖さを改めて思い

# 宮崎百山へ

八月月例山行報告

### 田勝之

げていくうちに次第に霧が出て 来光を見ようと、そのまま車で 午前〇時二〇分頃到着。朝の御 目標の鰐塚山(二八一四)山 の好天を期待しつつ南下。第一 らは星も見え始めてきた。明日 と雨は上がり、日向市あたりか ントを張って野営となる。 けてコンクリート擁壁の下にテ そして風も猛烈である。風を避 きて、山頂はものすごい霧の中 山頂を目指す。しかし高度を上 小雨の中。しかし県境を越える 台の車で一路宮崎へ。出発時は った今月のメンバーは五人。二 (金)の夜八時、サニーに集ま 宮崎百山」めぐり。十八日 八月の月例山行は 宮崎南部 一種に

して、記念写真のあと次に向か食を済ませ、一等三角点に挨拶ように湿らせている。早々に朝状態に湿った霧はテントを雨の風は大分おさまっているが飽和一夜明けるとやはり深い霧。

派な歩道だ。 照葉樹の林の中は下草のない立 草を分けて樹林に踏み込んだら、 濡れないようにヤブこぎ装備で ないのに雨具やスパッツなど、 明るい日差しの晩夏の宮崎平野。 三角点の山、牛の峠(元八. Om)。 た。九時十五分出発。降ってい は笹や草やウラジロが覆い被さ さな標識が目についた。登り口 すると大きなカーブのところに 郊外を通って高畑川遡り、荒れ た林道をドンドン上っていく。 「牛の峠登山口」と書かれた小 城インターから国道に出て、 相当なブッシュを予想させ 頂から下っていくと下界は

いる。 う霧島連山は霧と靄に包まれて 向こうにそびえて見えるであろ 城盆地が広がって見える。その る。そのおかげで右手下方に都 樹の林が無惨に切り払われてい 伐採地が開けた。下の方で作業 しており、立派に成長した照葉 しばらく登ると右下に広大な

と明るい広場の牛の峠山頂に着 いた。十時五分到着。山頂は霧 道を登っていくと、ひょっこり ら実に心持ちの良い照葉樹林の 藩の境界争いの跡と聞く。峠か 石柱が建っている。「論所跡」 飫肥領』と刻み込まれた大きな い峠についた。脇には『従是東 再び樹林の中となりやがて古 かっての薩摩藩と飫肥 霧がなくても展望は

> 的地は柳岳(空二)である。 休止のあと往路を下山。次の目 石柱がある。旧陸軍の天文観測 大きな八角形のコンクリートの のための「天測点」と聞く。小 ないところ。一 等三角点の横に

はもう一つの一等

はない。 分、 路を引き返す。 があるだけ。記念撮影をして往 林の中。ひっそりと三等三角点 も薄い霧の中、そして周りは樹 く続く。 葉樹林の中、小さなアップダウ 思いきや、显っぽい薄ぐらい照 やく稜線に出た。頂上は近いと グザグ、ジグザグ、イヤになる 先のスギの林内にはいると下草 入り口は猛ブッシュだが、直ぐ ンの単調な稜線道がまたしばら て午後一時に登山開始。ここも 林道脇の小広場で昼食を済ませ 小さな標識が道脇に見つかった らく林道を上ると柳岳登山口の ところから林道にはいる。しば る県道を進み、内之木場という ような単調な登りが続き、よう ようやく山頂に到着。ここ 城郊外に戻り、日南に抜 登り始めて一時間十五 造林地内の暗い道をジ け

林道を迂回するかしかないとい時まであと一時間以上待つか、 則に向け、今夜の野営地 通行止め。工事の終わる午後五 過ぎた所で改良工事のため全面 峠を越えて飫肥に入り、ダムを 県道に戻り日南に向けて東進。 て、 分。今日はこれでおしまいにし 登山口到着は午後三時二十五 明日の目的地小松山(九八八 探しへ

> 眺めることが出来た。 小松山の端正な三角形の山容を かけて大きく迂回する。その代 で、荒れた砂利道を五〇分以上 う。先を急ぐため林道へ。 わり林道の峠からは、明日登る 上では数分で行けそうな地点ま 地

は本降りとなった。国道を戻り め、朝食を済ませて出発する頃 しばしささやかな宴をはる。 ある。この下にテントを張り、 見ると広場の奥に大きな東屋が く、すでに営業は終えている。 の駅を見つけた。午後八時に近 を過ぎて少し行ったところで道 で飫肥の街を通過し、日南ダム 流して再出発。国道二二二号線 に車を停め、ゆっくり汗を洗い 生年金ハートピアというところ の看板が目についた。そこで厚 翌朝は四時頃からばらつき始 県道を下っていくと北郷温泉

もある。 内板があり、 た林道との分岐点に登山口の案 された林道を上っていくと荒れ 入る。集落を過ぎ、立派に舗装 小松山登山口バス停から市道に 駐車できる小広場

っていくと傾斜が急になり、落 ギの造林地である。ジグザグ登 けて林内に踏み込むと薄暗いス た登山口に着いた。草を踏み分 ほどで石原コースと名付けられ 二つほど別れ道があり、一時間 荒れた林道を歩いていくと途中 けて出発だ。しのつく雨の中、 午前六時ちょうど、雨具を着 照葉の混交林となる。雨具

> るい。雨具を脱ぎ再出発。急な を思わせる異様な雰囲気である 山頂一帯がまるで卒塔婆の林立 思いの記念の標識が立っており のもの山頂標識や登山者の思い 角点がある。その周りには幾本 な山頂には中央に大きな二等三 目の前が山頂。 線から来たコースと合流すると 登りをつめること約三〇分、 は上がっており、上空は幾分明 で一休みする。いつの間にか雨 さな平らな広場に着いた。ここ いくと林道から四○分ほどで小 に蒸されてあえぎながら登って 広い広場のよう

> > を食べて帰途へ。 ばかりというマグロ

を見物し、油津で水揚げされた

のトロの

車場到着。時刻は早いし、せつ

下山開始。一〇時一〇分には

かくの機会だからと、飫肥城跡

めるようになったが、

2

れ

なかなか繋が晴れてくれない。

ゆっくり休憩して八時五〇分





に日南市街地と日向灘方面が望 いるが周りは繋が流れて、僅か 空はすっかり青空が覗いて (小松山山頂で)

### お 知 5 せ

# 十一月月例山行の

場所 日 発 十二日(日) 登ります。 十一月十二日(日) 師山と北九州の山 12

### 十二月月例山行の 案内

サニー出発

日時 十一月十六、 涌蓋山(一合)と月出山岳 主 十七日 日

※重広恒夫さんの「ふるさとの 蓋山)と翌日の月出山 富士山を登る」玖珠富士(涌 岳に同

分着を出迎えて涌蓋山 登山します。 大分空港午前九 時 現五

します。 越、または一三時山頂集合と 参加者は一二時二〇分涌蓋

# 催につい

加をおお待ちしています。 のひとときを。多くの会員の参 重広恒夫さんも交えて楽しい宴 の富士山」登頂のため来県中の ねて、そして当日は「ふるさと 開催します。支部創立四〇周年 た全国支部懇談会の反省会も兼 の記念の歳の忘年会として、ま 平成一二年度の支部忘年会を

B五版

日時…一二月一六日 場所…八丁原ビュウホテル 午後六時から

会費…一二、〇〇〇円分馬 懇親会、一泊朝食込 九重町湯坪七三九 TEL O元七三七一九一三三四

出席申し込み…一二月二日

# まで(事務局へ)

ていただきたいと思います。 全国の会員との交流の輪を広げ だけ多くの方が積極的に参加し 支部懇談会開催県として出来る の通知が来ました。今年は全国

日本山岳会恒例の年次晩餐会

四

质

につい

7

所…親高輪プリンスホテル

国際館パミール大宴会

日

時…

一二月二日(土) 午後六時

会の参加者には参加費徴収の上 お配りしていますが、 が完成しました。全国支部懇談 東九州支部創立四〇周年記念誌 参加され

会費…一五,〇〇〇円

場「北辰」

込み期限一一月一七日まで) (出欠申し込み及び会費振り

周年の記念として、全員一部づ なかった会員の皆様方には四 つ是非ご購入ください。

# みやざき百山」

の出版のご案内

ました。ご希望の方は事務局ま の「みやざき百山」が出版され 日本山岳会宮崎支部著・編纂

ニー六ページ A5版 全ページカラー印刷。

定価二、一〇〇円 (税込)

局まで。 催されます。参加希望者は事務 出版記念祝賀会が次の通り開

申込先…事務局まで

価格…一 000 全八七ページ

円

日時 一一月一八日 (土)

ぎ登山家となった。そのアニー

アニーは亡き父の夢を受け継

場所 宮崎観光ホテル東館3F 一八時から

五,000円 碧の間

います。 ンペットソロ演奏も予定されて みやざき百山の写真展やトラ

### お正月のお勧め映 画

持が最も困難な『死の領域』。は人間の忍耐を越え、生命の維 K2を目指すアタック隊に無 標高八〇〇〇メートル。そこ

こった。 に下山せよ」だが、山頂目前の 線が届く。「嵐が発生、ただち アタック隊は、これを無視し頂 上を目指す。そして、悲劇は起

残ったのは三名。 でつたのは三名。その中にアニ巨大な雪崩から奇跡的の生き はいた。

別々の道を歩み始める。 許せないまま時が流れ、二人は てしまう。アニーはそんな兄を けるために、父のザイルを切っ ロッククライミング中に起きた 事故で、兄は妹と自分の命を助 その昔、アニーと父と兄との

戦が開始された。 によって、想像を絶する救出作 時間。今、命知らずの勇者たち きない。タイムリミットは二二 場にはヘリすら近づくことがで 救出部隊を編成する。 を拒み続けていた兄のピーター 受け、事故以来、山に入ること が八〇〇〇メートルのクレバス が、ベースキャンプに駆けつけ に閉じ込められたと言う連絡を しかし、悪天候のため事故現

前売り券が(一五〇〇円) ムで上映 局に一〇枚あります。

一二月九日よりシネフォーーラ

全国支部懇談会の準備でご

○ 記念山行も最高の天気に ウズハツの群落を、また田原 けど、先日御許山のふもとで 山のふもとでハタケシメジの 満足で帰って行かれました。 まれ、全国からの参加者は大 めることが出来ました。 皆様ご苦労様でした。 協力下さった会員の皆 群落を見つけました。 のないキノコはちょっと怖い 羨ましがるほどの大成功を納 た当日参加、ご加勢下さっ 秋の山はキノコの山。自信 おかげでで全国の参加 者が 恵 ま

K

### 日本山岳会東九州支部報

2 0 00年 (平成12 10月 3 0 発行者 編集者 徳之 梅 秀 木 飯 田 勝 〒870-0021 発行所 大分市府内町1

佐藤正八

題字

孝子方

097-532-0926